

人と人が響き合い、 対話できる音楽を



ピアニスト・オルガニスト・牧師

ウード・
シュニーベルガーさん

毎年11月11日に開催される「こころの祭 姫路」に参加しているウード・シュニーベルガーさんは、ピアニストでオルガニスト、そして姫路恵教会の宣教師でもあります。2014年には「ペル・ソナーレの会」を設立し、演奏会や研究会、音楽大学修了・在学中の音楽家を対象としたマスタークラスなどを開催しています。「わたしにとって演奏会と礼拝は、響き合う、対話するという意味では同じ。人を育てること、生きるお手伝いをする、それが、わたしがここにいる意味」と話します。

ドイツのケルン国立音楽大学を卒業後、ハイデルベルク教会立音楽大学でオルガン、古楽演奏、指揮を学び、1988年にはドイツのバート・ゾーベルンハイム市で国際音楽祭「マタイザー・ゾンマー・アカデミー」を創設。常任芸術監督として現在も2年に1度、音楽祭をプロデュースしています。1991年に武庫川女子大学音楽学部ピアノ科助教授として招聘され、その後は大阪芸術大学演奏学科講師に。大阪のいずみホール、東京のカザルスホールなどのほか、姫路ではパルナソスホールで演奏。観客のなかに市内の教会の牧師がいたことがきっかけで姫

路恵教会に赴任、現在は礼拝の司式と説教、演奏のすべてを担当しています。「礼拝は式文（手順）が決まっています、バッハは式文にあわせて音楽をつくらせた。教会音楽は祈りに音楽で応えるもので、ただの音的な壁紙ではないのです」。

「ペル・ソナーレ」とは「響きを通して」。「音楽は技術ではなく芸術。上手に整えてみせるのではなく、本音をさらけ出して演奏してこそ、観客と響き合い、対話もできる。作品に描かれた作曲家の人生や生きる気持ちを、演奏を通してみんなで味わいたい」。今年3月には第1回となる「ピアノ マスターズ in Himeji」を開催。6日間にわたってマスタークラスや演奏会などを実施しました。会の代表を務めるピアニストの江口里和さんは「お互いにレッスンを聴講したり、参加者同士で作品について話し合うことで、より深く、豊かな学びが得られる」と話します。

「こころの祭」会場となる姫路恵教会は木造建築で、独特の響きが特徴です。「リビングのようなアットホームな空間で、丸く広がる音に包まれる。レッスン生にとっても『こころの祭』のお客さまにとっても幸せなこと」とシュニーベルガーさん。プログラムはドビュッシー「前奏曲」より、メンデルスゾーン「厳格なる変奏曲 Op.54」、ベートーヴェン「ヴァイオリンソナタ第7番 Op.30-2」を予定しています。

※「こころの祭 姫路」の詳細は12ページに掲載しています。

表紙解説

姫路市立美術館

センス・オブ・ワンダーの庭

姫路市立美術館庭園アートプロジェクト
松井紫朗のセンス・オブ・ワンダー より

会期：12月2日(日)まで

改修のために休館中の姫路市立美術館の庭園に、8月26日に突如現れた謎の物体。レンガ色にスカイブルー、重厚な材質に対する軽快な佇まい。水平・垂直を基軸とする登録有形文化財の建物と、色、材質、フォルムの面で好対照な造形物です。このように、

造形言語により観る者を揺さぶる作家こそ、松井紫朗です。

「センス・オブ・ワンダーの庭」は、改修休館という一つの節目に松井氏を招聘して行っている、庭園アートプロジェクトの一環で展示しているもの。4点の立体からなる一つのサイト・スペシフィックなインスタレーション作品です。それぞれの立体は、膜構造体であり、気圧をコントロールすることにより形成されています。一部の作品には、直に足を踏み入れることができますので、ぜひ「センス・オブ・ワンダー」を体感してください。

※「センス・オブ・ワンダーの庭」は月曜（祝日の場合は翌日）、荒天時は休場します。